

(Service)に出た。家族ぐるみで毎週正装して出かける教会。大学の学生数は800人余り。そのうち13人の留学生がいたが、その留学生の休暇中の宿泊や年中行事への招待はこのよ
うな教会関係の人達によって世話されていた。

今回のホームステイ先の人達も教会に関わる人達が多かった。彼らを支える意識について迫りたいと思った。そうしたら私のホームステイ先は引退した宣教師ご夫妻であった。

2 外国に行ってその国以外の国について思わぬことを知る

先日、1年間のハワイ大学研修から戻られた方が、ハワイに行ってフィリピンの現地語が3つあることを知ったと言ってみえた。ハワイにはフィリピンからの移民が多く入っている。タガログ語の他にイロカーノ語とビスヤーノ語とあわせて3言語あるとのことである。また、自分はトスカナ人だと思っていた人がアメリカへ行って自分はイタリア人だと初めて知ったという話。そして私の場合は、今回アメリカへ行ってインドネシアのニューギニアのついて知ったのである。

ミネソタ州セントポールにて8月17日から8月20日までの間ホームステイを体験した。受け入れてくださったのは引退した宣教師夫妻であるジョン・ウィルソンとベティ・ウィルソンさんである。宣教師と聞いても牧師とあまりかわらず、ただあちこち教会を回ったりする牧師というイメージぐらいしか浮かんで来なかった。

ウィルソン夫妻の自宅は、カンボジアやタイからの移民が多い地区の中にある。大学時代ジョンさんが友人と2人で買った家の2階に今は住んでいる。1階は全く別の一家が住んでいる。この家は長い間人に貸していたとのこと。2階への階段を昇って入り口のドアを開けながらベティさんは "We are not rich." と最初に言われた。自分たちはお金持ちではないけれど、ここは落ち着いて夫婦2人で暮すには十分な住いである。そしてリビングとダイニングがひとつになった部屋のダイニング・テーブルで聞きたいいろいろ話。まず引退されてまだ1年であること。そして何よりもその前の35年間インドネシアのニューギニアで宣教生活を送り、昨年アメリカに帰ってきたばかりという話にびっくり。アメリカで暮した年月よりもニューギニアにいた年月の方が長いし、昨年帰ったばかりでアメリカでの生活にも最初はなじめず、やっと慣れてきたところだという。ニューギニアでの35年間の間に2人の子供も生まれ高校までニューギニアで育ったそうだ。今息子さんは結婚して2人の子供がありアラスカ州でパイロットをしている。息子さんに言わせればミネソタは人が多くて暮しにくい都会である。アラスカくらいが暮らしやすいとのこと。また娘さんはカリフォルニアにいる。セントポールで2人は質素な暮らしをしている。

帰国して見るアメリカ人の暮らし方についてベティさんは次のように語る。アメリカ人は "pretend" (ふりをしていること) がよくないと思う。人々は大きな車や大きな家を買う。それを買うために銀行からお金を借りている。車や家を持ってぜいたくな暮らしをしているふりをする。これはよくない。ニューギニアの人々は何も持っていない。あるがままの生活。そのままの素直な感情を隠さず出す。金持ちのふりをしない。

"They are what they are. They don't pretend. I like that."

ニューギニアの人々のありのままの素朴さが私は好きですと言われた。3泊4日のホームステイの間、食事の前には必ず聖書の朗読とお祈りが行なわれた。

食前のお祈りはアイオワの農家でも経験していたが食事への感謝と家族の健康を祈るものであり簡単なものであった。しかし今回の聖書の朗読はきちんとした内容であり、それに対する牧師であるジョンさんの解釈も加わっていた。教会で聞く説教 (sermon) のミニ版と言えるものである。初日の夕食は、詩編の Listening prayer であった。

"We talk too much and listen too little." (人は話に耳を傾けないものだ)

"We need to learn the art of listening prayer." (聞く力を養う必要がある)

という言葉に思わず生徒たちの顔が浮かぶ。私の口癖のような言葉となんて似ていること